

まち・ひと・しごと創生



村上市 人口ビジョン

平成27年12月

村上市



I . 人口の現状分析

1 人口の推移

(1) 人口の推移と推計

本市の総人口と年齢3区分別の人口について、これまでの推移と、国立社会保障・人口問題研究所（以下「社人研」）による平成52年までの推計を表したグラフです。（図1.1）

■総人口

本市の人口は、昭和30年の94,284人をピークに減少し続けています。平成52年には41,073人となり、平成27年の3分の2程度になると推計されています。

■年齢3区分人口

生産年齢人口、年少人口がともに減少を続けています。老年人口は増加していますが、平成32年をピークに減少に転じると推計されています。

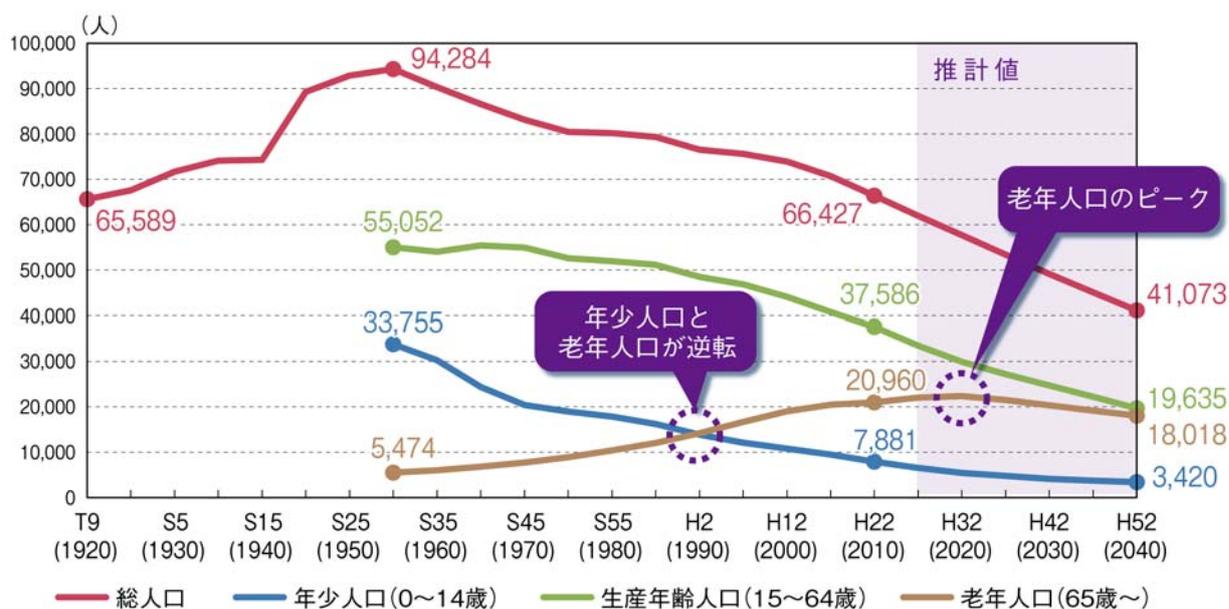


図1.1 総人口・年齢3区分別人口の推移

出典：国勢調査、社人研（H27以降）



- 平成52年には、老年人口と生産年齢人口がほぼ同程度になり、1人の働き手が1人の高齢者を支える状況になることが予想されます。
- 平成32年以降はすべての世代で減少傾向となることから、人口減少のスピードが加速していきます。

(2) 年齢別男女別人口の推移

昭和60年、平成22年、平成52年の3時点の人口構成を人口ピラミッドとして表したグラフです。(図1.2, 1.3, 1.4)

■昭和60(1985)年

若年層(20~24歳)の人口減少がみられるものの、生産年齢人口が人口構造の中心となっていることが分かります。

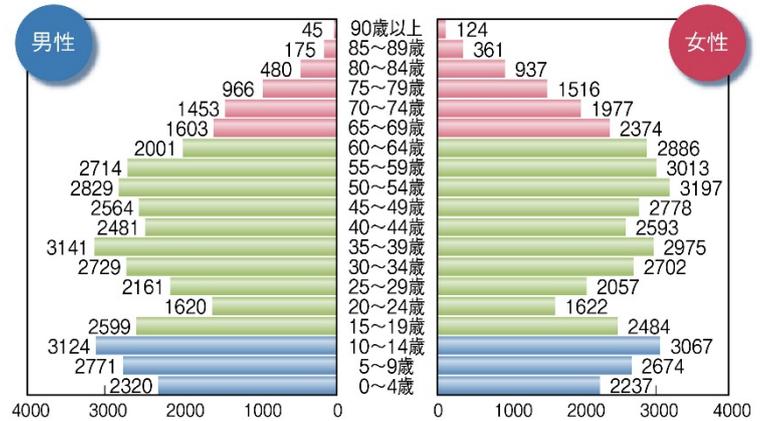


図1.2 人口ピラミッド(S60)

■平成22(2010)年

子どもと若年層の人口が減少し高齢者が増え、全体的に逆三角形に近い形になっています。

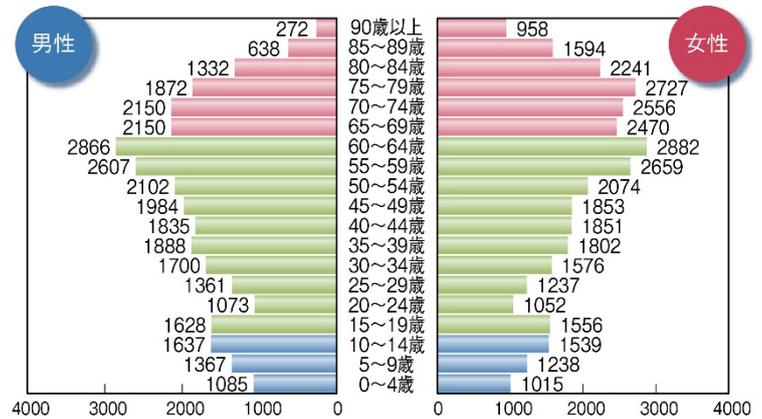


図1.3 人口ピラミッド(H22)

■平成52(2040)年

ほとんどの年齢区分で人口が減少し、ピラミッド全体が細くなります。人口構造も高齢化し、最も人口の多い年齢区分が男女ともに65歳以上となります。

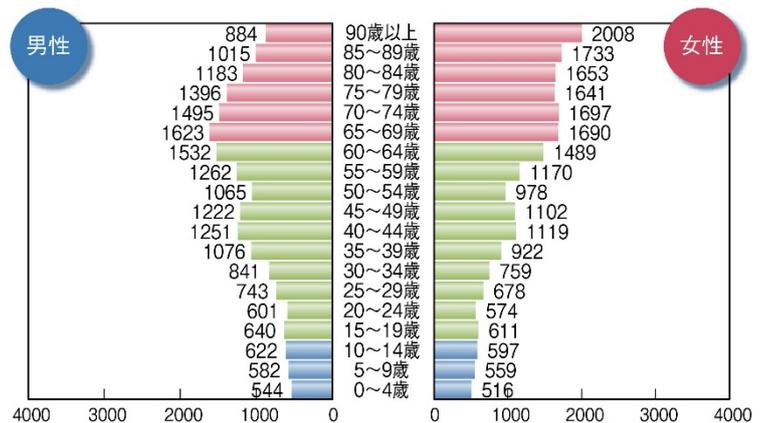


図1.4 人口ピラミッド(H52)

出典：国勢調査、社人研(H52)



- 少子高齢化と人口減少の影響により、だんだんとピラミッド全体が細くなり、人口の多い年齢区分がピラミッドの上部へ移動していきます。

2 自然増減と社会増減

(1) 出生数と死亡数の推移

昭和 60 年から平成 26 年までの自然動態（出生数と死亡数）について表したグラフです。（図 1.5）

■出生数

昭和 62 年から平成元年にかけて、出生数は大きく増加しましたが、その後は減少傾向で推移しており、平成 26 年の出生数は 364 人で、昭和 60 年（856 人）の半分以下になっています。

■死亡数

昭和 60 年以降、死亡数は増加傾向で推移しており、平成 26 年の死亡数は 980 人で、昭和 60 年（643 人）の 1.5 倍程度になっています。

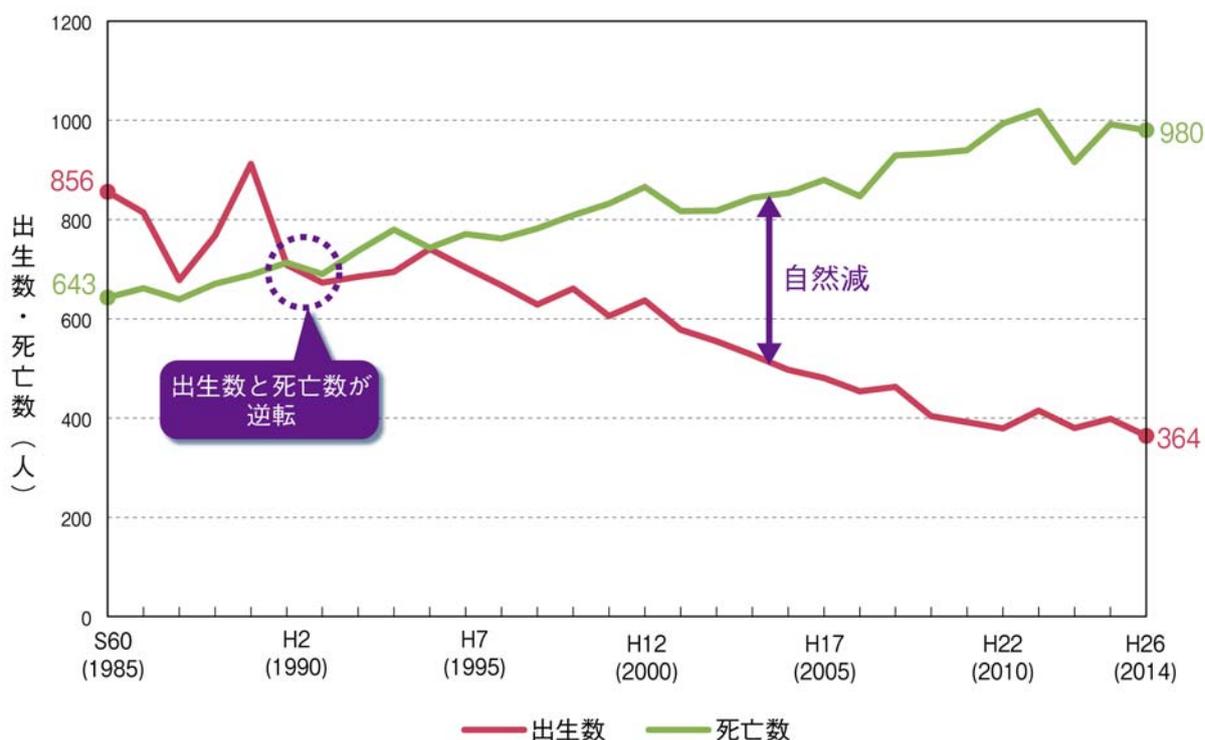


図 1.5 出生数・死亡数の推移

出典：新潟県の人口移動



- 昭和 60 年には出生数が死亡数より 213 人多く、人口は自然増の状態でしたが、平成 2 年には死亡数が出生数を上回り自然減の状態になりました。
- 高齢者数の増加に伴う死亡数の増加と出生数の減少により、自然減の値は年々大きくなっています。

(2) 合計特殊出生率の推移

全国、新潟県、本市の合計特殊出生率の推移と本市の出生数を表したグラフです。(図 1.6)

■合計特殊出生率

本市の合計特殊出生率は新潟県や全国の数よりも高くなっており、平成 25 年の合計特殊出生率は 1.61 となっています。新潟県と全国の合計特殊出生率は平成 17 年が最も低く、それ以降は上昇傾向となっています。本市では、平成 20 年に最も低い 1.34 となり、その後上昇傾向で推移しています。

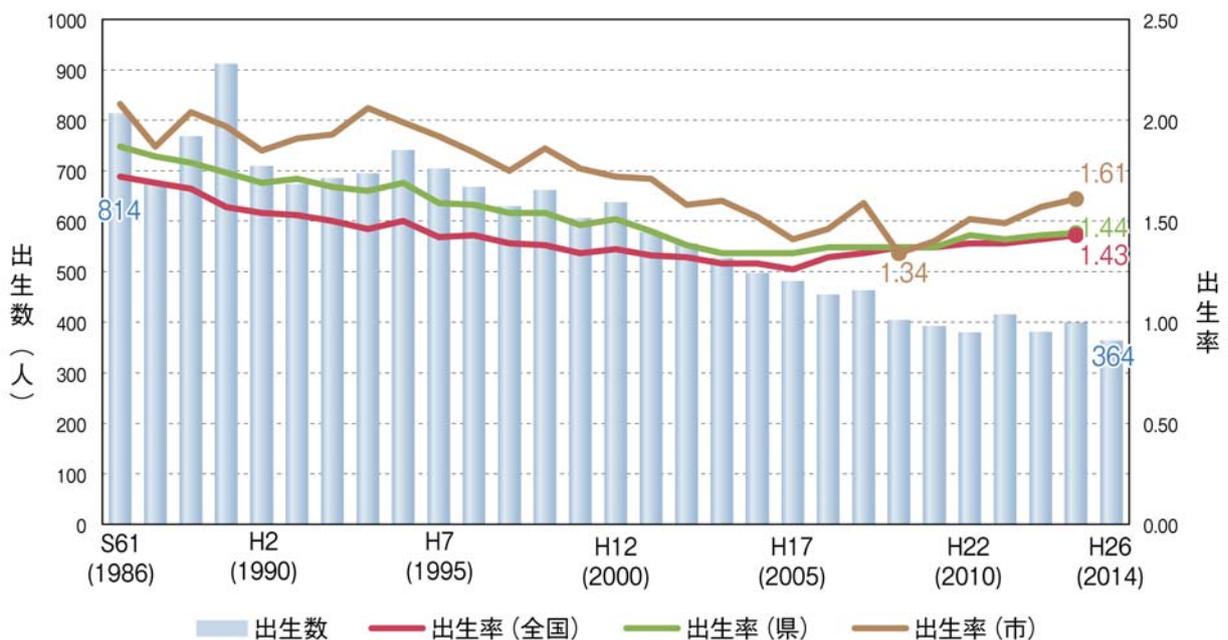


図 1.6 合計特殊出生率と出生数の推移

出典：新潟県の人口移動（出生数）
新潟県保健福祉年鑑（出生率）

※合計特殊出生率とは

15～49 歳までの女性の年齢別出生率を合計したもので、一人の女性が一生の間に生む子どもの数に相当する。



- 合計特殊出生率は、平成 20 年の 1.34 以降上昇していますが、出生数に大きな変化はありません。これは女性の人口が減少しているためと考えられます。